

# 我流子育て支援論

(7)

## ～ 中学生 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸由里子

中学生は、小学生よりさらに扱いの難しい時期であり、実際にどう扱ってよいのか分からないという相談も多い。特に中学校2年生というのは、中だるみでもあり、且つ学校内でも上級生と下級生の間にあって、まるで中間子の様に、自分を主張したいのか、あれこれ問題行動を起こすこともある。

思春期の過ごし方としては、基本的には、親子の間に少しずつ距離ができるというのがベストなのだが、少子化と保護者自身の精神的自立の未熟さが影響して、距離感が上手くつかめないことから起こっていると思われる問題が多い。

一般的に、小学校までは、保護者の言いなりになって、お利口さんだった子どもたちも、小学校高学年くらいから、大人への反発を持ち始め、それが激しくなるのが中学である。「うざい」「くそばばあ」などと言った、保護者としては聞き

たくない言葉を聞くようになる。

当然、保護者はムカッとして、「親に向かってなんだその口のきき方は！」とつい怒鳴ってしまうこともあるだろう。しかし、そういう言葉を吐ける子どもは、とても健常で力があると言える。翻訳すれば、「もう赤ちゃんじゃないんだから、うるさく言わないでくれ」「少しほっておいてくれ」ということなのだ。そうとわかれば、保護者も「はいはい」と受け流す事が出来る。「うざい」とか言いながらも、まだ揺れ動く思春期は、突っ張ったり、甘えたりを繰り返す。保護者は大きな生簀で放し飼いをするつもりで、子どもの揺らぎに寄り添っていればよい。

ところが、保護者の支配が強力だったり、子離れに対し余りにも不安が強い場合は、子どもの方が拒否のサインを出せないか、あるいは保護者が子どものサインを無視してしまう。結果として保護者に一切逆ら

わない子や、もう中学生なのに、保護者が、時間割を揃える、忘れ物を届けるなどから始まり、極端なケースでは着替えを手伝う、食事を食べさせる、頭を洗ってやる、一緒に寝るなど。「お殿様・お姫様か！」と突っ込みたくなるような状況の子どもを作る。

こういう状況が続くと、子どもは自分の考えを表出したり、自分なりの行動をしようという意欲が無くなっていく。無気力で大人しい子どもということで、不登校になっているケースに、このタイプが混ざっている。ただ、登校していると大した問題にならず、見過ごされるが、自立について考えたら大変大きな問題になるし、高校に行ってから不登校になる事も多い。

さて、中学生で相談にあがることは、不登校、非行（家出、深夜徘徊、万引き、不純異性交遊、援助交際などの虞犯行為から強盗、暴行傷害などの触法行為まで）、リストカットや摂食障害などの神経症圏の問題行動、親子関係、いじめ、友人関係、発達障がいや精神障害などが主だと思ふ。

ここで、個々の問題について考えてみたい。

#### <不登校>

不登校は小学生よりも中学生が圧倒的に多く、問題となる。これ程多くの子どもが不登校になるのには、幾つか要因があると思う。

第一に、「不登校」という言葉が大手を振って歩くようになったこと。つまり、「不登校」が世間一般に広まり、子どもたちが「不登校をしてもよい」という感覚を持っていることがある。中学校では、

クラスに一人や二人は不登校が居てもおかしくない時代なので、自分も学校が辛かったら休んでもよいと思っても不思議はない。「耐える」という言葉は殆ど死語に近いくらい、我慢しない、頑張れない子が増えた。

集団に居れば、嫌なことは日常茶飯事。それが当たり前だが、過保護に育った子どもたちは、嫌なことからは逃げる癖を付けている。

勉強が嫌、先生が嫌い、友達が嫌なことを言うから、ちょっとしたからかいやいじめがあるからと、当然のことのように不登校になる。極端な場合は、体育が嫌だからと体育のある日は休むとか、勉強は嫌だから普通の日休み、修学旅行などのイベントは平気で参加するなどといった、最近増えている「ニュータイプ」と呼ばれる選択的不登校もある。

こういうケースでは、父母の協力の下、適応指導教室もうまく活用しながら、ストレス耐性を付け、得意な科目からでも入れるようにして行く。支援者としては、甘くなりがちな父母への助言が第一になるだろう。「可哀そう」という気持ちを切り替え、「子どものために心を鬼に」してもらえない。

第二に、小学校と同様に、家族状況の不安定さを代弁する形での不登校がある。

離婚の危機、嫁姑問題、保護者や兄弟の病気（精神疾患や人格障害）、保護者の再婚の問題、保護者の恋人との関係性の問題、経済状況（リストラ）等々の家族の問題がある時に、安心して学校に通える子は学校での人間関係をしっかり築ける子に限られるだろう。

基本的には、保護者との関係より、同

年代の人間関係に移行するのがこの思春期の時期なので、上手く友人関係ができてきている子は強い。しかし、心の中に大きな波風が立っている状態で、尚且つ、学校にも居場所が無い子どもは、ひたすら引きこもるしかない。自分が問題行動を起こすことで家族の修復を無意識に試みている場合は、問題解決は中々難しい。

一つ事例をあげよう。A子は中学2年生だが、母親は再婚で、養父との関係が悪く、酷い喧嘩が続く中、母親も情緒不安定になり、A子に辛く当たるようになった。その結果、A子は不登校になっていった。相談を続けても、A子は中々登校できず、適応指導教室につないでも、母親の協力が少なく、安定しない。こういうケースでは、焦らず、一步ずつ、多少後退することがあっても、根気よく関係を繋いでいくことしかない。まだまだ時間がかかりそうである。

子どもが中学生になると、夫の悪口を言い続ける母親が増える。子どもにとっては、父親も母親も血の繋がった親であるということを、忘れてしまう。これは父母と子どもたちとの境界侵犯の問題である。支援者としては、子どもに夫婦の問題や嫁姑の問題をおろさない様にと伝えねばならない。

そして第三が、冒頭で触れたような内向的性格と言語表現の稚拙さの問題がある。

力の弱い、外に吐き出す事が出来ない子ども達は、ちょっとした人間関係の躓きをきっかけに、不登校を始める。理由のはっきりしない不登校では、このタイプが殆どではないかと思う。このタイプ

では、自分の気持ちを少しずつでも語れるようにすること、保護者に反発してはいけないと思っているようなら、親子関係を調整しつつ、反発することは悪いことではないと理解させることが必要だろう。

#### <非行>

中学生になると、喫煙、暴力行為、不純異性交遊、援助交際、万引き、窃盗、薬物使用、夜間徘徊や家出など、補導されたり、児童相談所のお世話になり、自立支援施設に入所するような子どもも出てくる。こういう子の殆どは家族の問題を抱えている。親子関係が悪い、家に自分の居場所がない、認められていない、貧困、保護者のアルコール問題や、DV、その他さまざまな家族葛藤を引き受けて、気持ちがすさみ、遊び仲間といる方がよほど楽しいからと、家にいつかなくなる。仲間同士で夜間徘徊、家出、窃盗、喫煙、万引きなどをしながら、日々を刹那に生きている。時には喧嘩や、親父狩り、浮浪者への暴行なども起こす。

家族全体に問題行動という意識が無い家族にも出会った。「他人の家の物も自分のもの、欲しければ盗ってこい」という教育(?)を受けているのだ。自分の保護者に、覚せい剤を勧められたり、売春を強要されたりなどという例もある。このような場合に家出をするなら、むしろ、歓迎すべき行動と言える。そんな家に行たくないと思うのは、とても健全だからだ。しかし、多くは、逃げることもなく、そこに居る。

こうした非行系の子どもたちにはどのような支援をしたら良いのだろうか？

家族の調整などは到底難しい場合が多

いが、まずは、家族の中のキーパーソンを探したり、家族間調整が可能かどうかのアセスメントを試みる。家族一人一人の話をじっくり聞いてあげることから始めるのも良いだろう。保護者自身の生い立ちにも、辛い日々があり、それを語ることで保護者が軟化する場合もある。そして、家族から子どもを離すべきかどうかの判断をしていかねばならないだろう。

どんな保護者でも、子どもにとっては血の繋がった親である。親子を切り離せばそれでよいということではない。虐待があれば当然児童相談所に通告し、子どもの保護が必要かどうかを共に検討することができるだろう。しかし、虐待がない場合は、保護者が困らなければ支援者としても中々支援に入りにくい。

非行系の場合は、大抵どこかで補導されるのがきっかけになったり、保護者からの相談で介入できるが、学校だけが困っている場合は介入に至らない。それは結局、親子・家族の問題だからである。

ここで一つだけ述べておきたいことがある。

学校が、最初から「悪」というレッテルを貼って、こういう子を排斥しようとするほど、状況は悪化するということだけは気を付けておかねばならない。最近の子どもたちの様子からいえば、非行に走れる力を持っている方がむしろ健全と言えるかもしれない。

#### <家庭内暴力>

中学生ともなれば、体力もついてくるので、暴力が始まると、母親では太刀打ちできなくなることが多い。家庭内暴力の陰には、父親不在の問題が大きくある

と思う。単身赴任や、家を顧みない父親、或いは、存在感の薄い父親と、過保護、過干渉の母親の家庭に家庭内暴力は起きやすいと感じている。もちろんそれだけではなく、家庭内暴力の陰に精神疾患や発達障がいが見られることもある。従って我々支援者は、母親を支え、父親が力を持って子どもと対峙できる様に、何かしらの手立てを考えて行くこと、精神疾患や発達障がいとその陰にないかどうかを査定することが仕事になるだろう。家庭内暴力の子どもは、本人自身がとても苦しんでいるし、孤独であることを父母に理解して貰えないと解決は難しい。

こんな事例があった。息子の家庭内暴力を恐れた父母が家を出た。一人残された息子は、「助けて!」と窓に張り紙をし、犬と寂しく 過ごしていた。母親は時々食べ物を運んだが、父親は「折角建てた家を滅茶苦茶にした」と 腹を立てていた。そんな父母の面接で、こんな言葉が出た。「犬を救出しに行かなければならないんです!」と。息子の暴力から、犬を守らねばというのだ。筆者は「犬は息子さんにとって唯一の理解者であり支えです。息子さんが犬をどうにかすることはありません。『助けて』という言葉が一体誰に向けている言葉なのか、もう一度考えてみてください。」と伝えた。その後、母親は家に戻り、母親の話では少しずつ落ち着いてきたとのことであった。

#### <精神疾患や発達障がい>

我が子に精神疾患や、発達障がいがあるなどということは、どんな親でも受け入れがたいであろう。しかし、我々支援者は時により、保護者に理解させねばならない。暴力がある場合は、困っている

ことが多いので、比較的支援に入りやすい。病院受診などにつなげることも可能だ。しかし、暴力はなく、学校での集団不適応感、或いは人間関係や集団行動における問題行動については、家では限られた環境下であるため、問題行動は見られず、発達障がいや精神疾患の認識を保護者に持たせることは難しい。じっくり時間をかけて、保護者面接を繰り返し、学校での様子を見学してもらったりしながら、理解を促していく。

特に発達障がいの子どもにとって、中学卒業後の進路は大問題である。軽度の精神発達遅滞については、無理して普通高校や私立高校、或いは定時制高校などに入れる保護者も多い。しかし、何とか入った高校を中退してしまったり、普通高校を出ても、就職試験に受からなかったり、仕事が長続きしなかったり、要求される仕事が出来なかったりなど、職場不適応を起こすなどして結局働けないことも多い。また、広汎性発達障がいでは、知的には問題ないのだが、その知能構造のばらつき故に、職場不適応や人間関係の躓きで、やはり仕事が続き、引きこもりになる可能性も高い。

以前、こんな事例があった。重度の自閉症と思われる子どもが、普通学級にいた。この子には特殊な能力があり、母親の送るサインを受信できるため、定期試験なども母親がいると高得点を取れる。そのため、保護者は、子どもが実は能力があるのだが、一人では緊張して出せないだけなのだど勘違いしていた。子どもと関わってみると、言葉もオウム返ししかなく、数も一つは理解するが、二つ以上だと怪しい状況だった。板書を写すこ

とはできる。漢字や数字を書くことも出来た。しかし、理解しているとは思えなかった。そこで、保護者の前で、実験をして、子どもが、問題を理解して解いているのではないということを見せ、この能力があっても、結局は余り役に立たないことを理解して貰った。進路は特別支援学校になったが、一人しかいない我が子の障がいを受け入れるには大変な苦悩があったと思う。それでも、この子の将来を考えたら、福祉制度ののせて行かざるを得ないと考えての進路だった。

中学は3年間しかなく、子どもや保護者に変化を起こすには、時間が足りないかもしれない。それでも、義務教育の最後ということ意識し、子どもと保護者にとって最善の方向性を示していかなければならない。それが支援者の務めであろう。その後、保護者がどのような選択をするかについては、保護者に任せるしかない。

リストカットや摂食障害、自己臭などについても、問題化してくる時期でもある。漫画やドラマなどの影響もあるが、殆どが母子関係にその原因があり、母親との面談が必須になる。精神障がいも含め、必要に応じ、医療機関に繋いでいかねばならない。地域の医療機関についての情報、SST訓練の場等、様々な資源について情報を集めておくことも支援者の仕事となる。

#### <いじめ・人間関係>

いじめと人間関係の問題は、小中高あるいは大人の世界でも共通の問題であろう。全般的に幼く、人とのコミュニケーション能力が低く、一度崩れた人間関係は修復不可能とってしまう子どもたちに、人間関係というものはずっとしなや

かなものであると伝えたり、自分と他人との違いを理解し、受け入れることの大切さから伝えて行かねばならない。発達障がいがあるがなかろうが、人それぞれなのだという、いじめることで自分のフラストレーションを解消するのは間違っただけのやり方であると理解させることが、我々支援者の仕事だろう。

いじめ被害で自殺は最も悲惨な例である。「いじめられて居る事を保護者に話せない」、「心配を掛けたくない」、「格好悪い」など、いじめを受けている子どもの多くがそんなことを言う。保護者に助けを求められないとしたら、誰にも相談できなくて孤立したら、「死」という、最悪の逃げを選択してしまう気持ちも分からなくはない。酷いいじめを受けたら、「不登校」を選択したって良いし、保護者に心配を掛けただって良いと伝えよう。しかし、一方でいじめに対する耐性も育てていかねばならない。何処に行っても、程度の差こそあれ、「いじめ」は存在するのだから。

耐性の基盤は、やはり親子関係だと思う。保護者から守られている、保護者が後ろ盾になってくれている、保護者に信頼されている、しかも、駄目な自分も受け入れてくれる、そういう基盤がしっかり子どもにあれば、頑張れるだろう。その基盤をどう作っていくか、中学生までに作られていないとしたら、どうすれば良いのか？そこが大きな問題となるだろう。修復できる状況であれば、修復に全力を尽くすが、不可能であれば、代理の人間関係を用意して、そこで強化していくしかないだろう。

<携帯電話やパソコンの問題>

中学生の生活は、小学校とは大きく異なる。都会では、小学校から塾に通っているだろうが、地方では、中学校から塾に通う方が多い。

塾だけではなく、部活動で、帰宅時間が遅くなることは、小学校と異なる点であろう。保護者が送り迎えすることもあるが、子どもだけで動いている家も多い。そういう家では、子どもに携帯電話を持たせている。

中学生の携帯電話所持については、賛否両論があるようだ。都会では持たせてもよいと思っている家庭が多いようだが、筆者としては賛成できない。持たせるのなら、パソコンも携帯電話も、その扱いについて、十分に家族で話し合いがなされ、「自室に置かない」、「夜は10時以降使用禁止」、「保護機能の活用」など、ルール設定をすべきだ。そして、ルールを破ったら、直ぐに保護者が契約を解除したり、取り上げたりという措置をとれなければならない。

問題のある家庭では、保護者にその力がない場合が多い。その結果、夜中にメールをしたり、PCゲームをして過ごし、昼夜逆転になっていくケースを多々見かける。支援者としては、ここでも保護者に「心を鬼にして」貰うよう説得する必要がある。

問題行動があっても、子どもが自分で考え、自律的に行動できるように、育てていくのが、学校や保護者の仕事であろう。そして、我々支援者は、そうした学校や保護者と協力して、保護者や子どもたちを支援していくべきであろう。中学生は、まだまだ未熟で、昔に比べれば幼

いということも、支援者は理解しておかねばならない。

人は信じられるとそれに応えようとする性質を持っていると思う。何度裏切られても、信じる姿勢を維持できれば、いずれ子どもは変わっていく。それは大人も同じだ。どうしようもない、酷い保護者でも、良いところ、頑張っているところを認め、信じていけば、きっと関係性を築く事が出来る。そして、「子どもの気持ちを考え、保護者が少し距離をとってあげることは、子どもの成長、自立のために必要である」と伝え、親子の間に境界がしっかり引かれるように支援を続けよう。そうすれば、思春期の子どもたちは、友人との関係を密にしていくようになるだろう。それが中学生のあるべき姿ではないだろうか。

次回は思春期後半、大人への過渡期について書こうと思う。